

第42回大阪の医療と福祉を考える公開討論会

新型コロナ感染対策

「若い世代へメッセージ」

大阪府医師会は10月16日午後、第42回大阪の医療と福祉を考える公開討論会を開催。「新型コロナ感染対策——いつまで続く？ 若い世代が今とるべき行動とは」をテーマに、パネリストによる講演および意見交換を展開しました。今回は一人でも多くの若い方に正しい情報を届けたいとの思いもあり、YouTubeによるライブ配信としました。



総合司会は野嶋紗己子・MBSアナウンサー、コメンテーターは阪本栄理事が務め、冒頭、茂松茂人会長があいさつ。新型コロナに関して、ネットを中心に様々な情報が出回っている状況を危惧し、感染者の中でも割合の高い「若い世代」に正しい知見を深めてもらいたいと語りました。

◆行政の長の立場から——吉村洋文・大阪府知事



「コロナウイルスはゼロにならない」とし、ウィズコロナにおける社会経済活動をどう進めるかが今後の課題と述べました。また、第5波の感染状況の特徴や後遺症について説明。これからの感染対策では若い世代がキーパーソンになるとし、▽正しい知識に基づいたワクチン接種▽少しでも症状があれば早期受診▽ワクチン接種後も感染防止対策を継続——が重要と呼び掛けました。

◆若い世代の立場から——大倉士門氏（タレント）



PCR検査で「陽性」となった自身の経験を、野嶋アナウンサーとの対話形式で話しました。感染時は「まさか自分が」という気持ちだったと述べ、家族や周りの人のことを考えて生活を改めたと振り返りました。一方で、若い世代では「ワクチンを打たなくても大丈夫」と考えている人も多い印象とし、間違った情報に流されず、「後悔のない選択をしてほしい」と訴えました。

◆専門家の立場から——忽那賢志・大阪大学大学院医学系研究科感染制御学教授



新型コロナの感染力は強力で、また、「基礎疾患がない若者でも重症化することがある」と注意を促しました。症状は、せきや倦怠感のほか、記憶障害、集中力低下、抑うつ、嗅覚・味覚障害など様々で、半年以上、後遺症が残ることもあるとしました。更に、ワクチンについては、副反応があっても1～2日でほとんどの人は収まるので、安心して接種を検討してほしいと述べました。

◆医師会の立場から——茂松茂人・大阪府医師会長



第4波では、自宅療養中に医療に結びつかずに亡くなられた方もおられ、「適切な医療が届く体制づくりに取り組んだ」と説明しました。府医では、早期治療・早期回復を念頭に、「自宅療養者への対応ガイド」を作成し、▽電話・オンライン診療▽かかりつけ医の往診▽チーム往診▽訪問看護ステーションとの連携——などによる体制を築いたことが報告されました。最後に、若い世代のワクチン接種状況に触れ、自治体に確認の上、できるだけ早い接種を促しました。